

今後の国土数値情報の整備のあり方に関する検討会 第2回会合
議事要旨

1. 日時・場所

令和5年11月17日（金）18：00～20：00

場所 株式会社三菱総合研究所 CR-D/E会議室（オンライン併用）

2. 出席者（敬称略、委員五十音順）

（委員）

秋山委員、桜井委員、杉本委員、瀬戸委員（座長）、高木委員、西澤委員、溝淵委員

（ゲストスピーカー）

一般財団法人 計量計画研究所

業務執行理事・牧村様

都市・地域環境部門主幹研究員・森尾様

東京カートグラフィック株式会社

企画営業部部長・石川様

技術開発部 地図地理エンタメプロデューサー
・村松様

ディー・フォー・ディー・アール株式会社

代表取締役社長・藤元様

（事務局）

国土交通省政策統括官付情報活用推進課

株式会社三菱総合研究所 社会インフラ事業本部

3. 議事

（1）第1回会合における議論の要旨確認（資料2）

（2）ゲストスピーカーからの話題提供・意見交換（資料3-1、3-2、3-3）

（2）今後の議論の進め方について・総合討議（資料4）

4. 議事要旨

前回（第1回会合）議論の要旨の確認の後、各議題について資料に基づき説明が行われた後、質疑及び意見交換等が行われた。

【ゲストスピーカーからの話題提供】

①国土都市交通の分野におけるGIS・地理空間情報等の活用状況

(一財) 計量計画研究所の牧村、森尾両氏より、国土都市交通分野における行政からの受託調査やその成果(公表物)における地理空間情報の利活用事例などについて説明が行われたのち、質疑等が行われた。

- ・特に公共の公表物の場合、出典の明示や必要な許諾といったデータライセンスの問題は重要。個人とそれ以外などでデータライセンスの取り扱いは異なるなど、民間の地図データなどを個人以外で利用するのは難しい場合が多い。こうしたライセンスがクリアされているという意味で、国土数値情報は使いやすい。
- ・事例の自治体業務では国土数値情報の上にそれぞれの自治体の(細かい)情報を重ねて使うなどしているが、単に細かければよいのではなく、必要な細かさがある。また、細かさだけではなく、土地利用細分メッシュや将来人口推計メッシュなど、個々の自治体では整備できないものは国土数値情報に頼るなど、要は役割分担ということだろう。その中で、国土数値情報が役割を担っているものは更新頻度やスケジュール提示等も期待したい。
- ・国土数値情報等をダウンロードした後で位置情報等のずれを補正しているケースもあるということだが、こうしたデータを第三者に提供したりするという枠組みの可能性も役割分担という概念の中であるのではないか。

②教育分野事業における国土数値情報の利活用と課題

東京カートグラフィック(株)の石川、村松両氏より、教育分野事業での国土数値情報等地理空間情報の利活用について、「ハザードマップゲーム」などの事例も踏まえた説明が行われたのち、質疑等が行われた。

- ・教育の現場では、国土数値情報はそのままでは探せないし、使えない。すぐに使えるわかりやすいものがよい。
- ・教育の現場では、網羅的な地域を対象とした正確性や完全性は、常に重要というわけではない。また、身近な地域を対象にした情報が容易に取得できることの方が望まれる傾向がある。
- ・地理教育、GIS教育が必ずしも十分ではないというのは、初等・中等教育だけでなく、大学を含む高等教育でも同様。これは生徒、学生に限らず教師・教員でもそう。例えば大学の土木系であってもGISの知見がない人もいる。こうした状況の中、紹介されたような地理教育、GIS教育の支援ツール(アプリ)は高校向け以外にも有用だと思う。

- ・地域によって防災データの表現（カテゴライズ等）が揃っていなかったり、そもそも防災マップがなかったり公開されていなかったりする。紙図面から手作業でデジタル化・変換等を行い揃えることで活用できているが、そもそも「防災データがない」については、「ないから安全」という誤解を生む恐れがある。その意味でも防災については全国的、俯瞰的な視点が重要。自治体毎に区切るものでもない。

③バックキャスト視点で考える G 空間データ活用シーン

ディー・フォー・ディー・アール（株）藤元氏より、ハードインフラを基層にソフトインフラ、データレイヤー、サービスアプリケーション、コンテンツ等が重なり合う都市OSという考え方などから、幅広い意味での地理空間情報の利活用やバックキャストからの将来の可能性についての説明ののち、質疑等が行われた。

- ・これからの社会では、（既存の）社会リソースをどうマネジメントするかが重要で、そのためにはこれらに関するモノや歴史、静的／動的さまざまなデータが参考になり得るし、そのデータの見える化や収集・提供が大事。
- ・空き家や耕作放棄地など、データを収集する取組もあり、これらがしくみとしてできるとよい。
- ・国土数値情報等の静的なデータや、人流データなどの動的データを重ね合わせ、掛け算することで様々な可能性が広がる。加えて、国土数値情報には「伝統的建造物群保存地区」など地域資源や保護保全に関するデータもあり、組み合わせとしては面白い。

【総合討議:今後の議論の進め方について】

事務局から今後の議論の進め方等について、来年4月以降も継続して検討する点を含めて説明が行われたのち、質疑等が行われた。

- ・検討会を来年4月以降も継続する点については、問題無い。
- ・言葉の問題になるが、データの「整備」なのか「投資」なのか。整備という言葉を使うと、網羅性などが必要な印象。重点投資分野という視点も大事なのでは。
- ・上記に関連し、基本的な情報なのか、応用的な情報なのかという視点も重要。目的があれば投資になるし、種類を揃えていくべき、などの方針も決まってくる。教育分野の事例紹介で

は概略データでも良いという話がある一方、専門分野では深くあるべきという側面もある。「データをつくる」という意味での「整備手法」は重要な部分。手法を検討することで効率化含め幅広いデータを揃えられることになる。国土数値情報のポジションを決めていくことが重要。

- ・ユーザーの拡大に際しては、こう組み合わせるとこういうことが分かるという、データセット（ユースケース）があるとイメージしやすい。
- ・国土数値情報とは何のためか、誰のためか、が一番重要。それがはっきりすれば、自ずから拡大・縮小すべきかも決まるし、今回の議論は良い機会。ユーザーの意見を押し返るのが大事で、その中で最大公約数的な整備をするというのも一つの考え。
- ・ゲストスピーカーの話聞いて、結構ざっくりしたデータで全国を網羅というのが求められている側面があると感じた。自治体の立場で見ても、その上で必要な（細かい）データは自治体が作成し、それを国土数値情報から案内するというのも良い。国土数値情報だけに負担を求めるのではなく、オープンデータをうまく案内するということ。
- ・国土数値情報整備に携わった立場からは、「ざっくり」という概念も、利用用途によって求められる細かさが異なるので悩ましい。その上で、第一義的には国や自治体への提供を想定し、それが教育や民間にもつながるといった考え方ではないか。
- ・今日の話提供や議論は、国土数値情報に限らず地理空間情報全般にわたるもので、必ずしも国土数値情報の整備方針の検討に直結するものばかりではないが、これらもふまえて、方向感や、国土数値情報として求められる位置づけを整理していきたい。

以 上